

Title	新秩序期インドネシアのポピュラー・カルチャー： 若者向け娯楽誌にみる「新しさ」の構築
Author(s)	齊場, 愛
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59129
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	齋 場 (竹下) 愛
博士の専攻分野の名称	博士 (学術)
学位記番号	第 24876 号
学位授与年月日	平成23年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	新秩序期インドネシアのポピュラー・カルチャー —若者向け娯楽誌にみる「新しさ」の構築—
論文審査委員	(主査) 教授 松野 明久 (副査) 教授 富田 健次 教授 青野 繁治 准教授 福岡まどか 准教授 原 真由子

論文内容の要旨

60年代の半ば、「新秩序」と名付けられた政治体制をもって政治の実権を掌握し、以後30年以上の長期にわたって秩序と安定を掲げた開発政策を展開してきたスハルト大統領は、98年、自らの開発政策の成果ともいえる新たな消費文化やメディア文化を享受して育った若者世代から辞任要求を突き付けられ、その政権の幕を閉じた。本論文は、このような新秩序という一つの時代の誕生から終焉までを、「新しさ」という価値の追求の中に自らの「若者らしさ」を見出してきた若者世代の意識のあり方との相互関係から読み解く試みであり、そのような価値追求のフィールドであったと考えられる「ポピュラー・カルチャー」に注目する。このような試みにあたって本研究が取り扱うのは、体制転換後の政治的・社会的混乱の時代に、独立後第一世代の若者たちの間にひとつの新たな世代意識の源を提供してきた67年創刊の『アクトゥイル』誌を中心とする「若者向け娯楽誌」である。これらの媒体の分析を通じて若者世代の意識構築のプロセスを辿り、彼らの意識と彼らを取り巻いていた社会的・政治的条件とのせめぎ合いが織なしてきた新秩序という一つの時代のあり方を読み解いてみたい。

9.30事件を契機に国家の治安・秩序の護持者であることを掲げて政権奪取に躍り出たスハルト体制は、自らを「新秩序」名付け、一方でスカルノの「指導される民主主義」政権を「旧秩序」として他者化し、自らの「新しさ」を強調した。これと同時にスハルト体制は、「旧秩序」が新植民地主義のシンボルであるとして排斥してきた欧米のポピュラー・カルチャーを解禁し、普及に努めることでも自らの推進する西側寄り外交政策の「新しさ」を宣伝した。一方、67年に地方都市バンドンのミニコミ誌として地元若者たちが創刊した『アクトゥイル』は、にわかに解禁された欧米のポピュラー・カルチャー情報を包括的に国内に持込んだ最初の媒体として創刊から3年の間に雑誌媒体としてインドネシアでは例を見ない発行部数を記録し、「若者向け娯楽誌」という新たな雑誌ジャンルを確立する。その急成長は欧米ポピュラー・カルチャーの解禁とそのシンボリック利用を通じて試みていた新政権の文化政策を追い風としたものである一方、そのような新秩序構築の論理とは異質な、ある独自の世代意識の磁場を創り出すものであった。当時、インドネシアの都市部では当局から管理や統制を受けていない無許可のアマチュア・ラジオ放送が欧米のポピュラー音楽の解禁を受けて乱立し、「新しく」とも、「無秩序」な音響の世界を生み出していた。『アクトゥイル』の登場は、そうした無秩序なオーディオ世界を集約し、分節化してひとつの新たなオーディオ的空間を再編するものとなり、情報の送り手と受け手、そしてテキストに登場する諸々の文化実践者たちとのボーダーが限りなく取り払われた一つの「地図にはないコミュニティ」空間を創りだして、読者らをその内部に誘い込んだ。おりしも世界を席卷していたカウンター・カルチャーの影響は、この雑

誌に社会通念や既存概念の破壊を掲げる対抗文化の祝祭性と、先行世代を仮想敵とする共同戦線の幻想を持ち込み、読者らのこのコミュニティへの帰属意識を一層強めるものとなった。

『アクトゥイル』の急速な躍進は同時に若者世代を実践主体とするもろもろのポピュラー・カルチャーの誕生も媒介した。国内各地におけるロック・バンドの編成ブームもその一つであった。また、先行雑誌が存在しなかった時代に、雑誌出版のスキルや経験を持たないアマチュアの若者集団が手探りで印刷技術を身につけ、実験的な手法で製作していたこの雑誌は、オーディオ・ビジュアル・メディアの普及がなかった当時のインドネシアで、当世のグローバルなロック・シーンやそれに付随する独特のファッションを全国の若者たち伝える貴重な情報源となっただけでなく、「若者らしさ」を示す記号としてのファッションやスタイルについてのコンセンサスを創りだし、それらを資本とする新たなファッション産業や、広告産業の振興を促した。このようなプロセスは、とりもなおさず「若者らしさ」の表象やアイデンティティめぐる文化的意味の生産と再生産のサイクル構築のプロセスであり、そこから導き出される文化表象やそのアイデンティティは、必然的に、「新しい」ものとして提示された。『アクトゥイル』は、インドネシアに若者文化の文化的意味生産のサイクルを初めて開いた媒体であると同時に、「新しさ」の追求こそが「若いハートを持つ者」の主体化において最も優先されるべき課題であるというコンセンサスそのものを同時に作り上げたのである。一方、『アクトゥイル』が提示する「新しさ」の空間は、指導民主主義時代のみならず、「新秩序」政権樹立後も、若者世代の「行き過ぎた」対抗文化的姿勢を戒めるスローガンとして当局が標榜していた「インドネシアの個性」に集約される領域主義的言説の支配からの離脱へと、読者を誘う空間であった。新秩序樹立の露払い役として66年世代という呼称を与えられてきた学生世代よりも若く、9.30事件直後、軍部とメディアの共謀が、社会秩序を恐怖で支配していた不穏な時代を無力な子供として過ごしてきた『アクティル』世代にとって、『アクトゥイル』が創出してきた「新しさ」の空間は、さながら65年以降の領域主義的秩序構築の暴力がもたらしてきた集合的なトラウマの記憶の反転した、大人世代の介入しない一つのユートピアでもあった。

もっとも、このようなアナキーとも呼び得るような『アクトゥイル』の脱領域主義的な意識空間は、開発主義政策の展開に取り込まれ、見る間に新たな若者文化産業のリソースとして「再領域化」されてゆく成り行きを拒むものではなかった。『アクトゥイル』の商業的成功は、70年代の半ばごろから競合誌の乱立をはじめとする「ルマジャ（若者）向け」の新たな娯楽産業やイメージ産業の振興に結び付いた。そして78年にこの雑誌が若者向け娯楽媒体のパイオニアとしてのミッションを終えるように実質上の廃刊を迎えてからは、巨大メディア産業が『アクトゥイル』が構築してきた「若者らしさ」創出のサイクルを、潤沢な資本と蓄積された雑誌出版のノウハウによって洗練化し、『ハイ』や『ガディス』に代表される消費主義的な「ルマジャ」誌を生み出して、国内の若者向け娯楽産業やイメージ産業の世界をリードしはじめた。

かくして、『アクトゥイル』がパイオニアとなって編成してきた若者世代向けポピュラー・カルチャーの世界は、その後の社会状況や政治的条件のもとで、若者世代を「ルマジャ」と呼ばれる客体的な消費者として再配置し、開発主義とさらに強化されてゆく権威主義的国家なヘゲモニーの反映されたテキストを提示しはじめた。80年代の代表的若者向け娯楽誌である『ハイ』にも、78年以降推進されてきた若者世代の非政治化とパンチャシラ国家原則による思想の一元化、国軍の二重機能強化という当時の社会的・政治的趨勢を伝える記事が躍っている。また新秩序の体制強化がピークを迎える80年代の半ば以降は、84年に創作され、その後学校教育の現場で例年鑑賞を義務付けられた反共プロバガンダ映画『9.30事件共産党の裏切り』と同様に、もはや事件の記憶をもたない世代に、反共意識と、共産分子を抑制した現政権の正統性をアピールすることを目的につくられた記事が繰り返し掲載されるようになっていく。しかしながら一方では、このようなヘゲモニックな言説を上書きするテキストに紛れるように、領域主義的な秩序維持の言説や、その普及のエージェントである学校や公権力への密かな揶揄や他者的感覚をちらつかせている諸々のテキストが誌面には混在しており、個々の読者の意識を『アクトゥイル』の時代と同様の、ひとつの秩序解体的な同世代意識でつなぐものとなってきた。このような「無秩序」なテキストの存在はそれ自体が、気がつけば新たなリテラシーを獲得していた若者世代による、パターン化したヘゲモニックな言説の氾濫に対する彼ら自身の言語による違和感の表明であった。

新秩序と呼ばれた一つの時代の終焉も、そのようにして変化と新しさの中に自らを見出そうとした若者たちの衝動がもたらしたものである。90年代以降、オーディオビジュアル媒体の普及やインターネットの登場は、ちょうど『アクトゥイル』世代のジュニア世代である、MTV世代と呼ばれる新たなメディア・リテラシーを有する若者世代を生み出してきた。「新秩序」を終焉に導いた98年の学生デモは、加速化す

るグローバル化と、強化される一途の領域主義的秩序という、相反する二つの力が意識のねじれと閉塞をもたらすようになった新秩序という「古い皮袋」からの脱却と自分探しをかけた、若者世代の「渾身のライブ」として演じられた。そしてCNNやインターネットを通じて世界に映し出された彼ら対し、世界中のオーディエンスらは支持を表明したのである。このように、変化と新しさの中に自らの「若者らしさ」を見出そうとする若者たちの自分探しの衝動は、時として彼ら自身の意思を超えたところでヘゲモニーを攪乱し、時には集散的なカウンターヘゲモニーを編成して、グロスバークの言う変動的状況、すなわち、個人の意志や行動が、個々の状況下で遭遇する諸条件と相互的に結合し、また衝突して一連のプロセスを生み出し、ある文化や社会を編成してゆく状況を生み出してゆく可能性を持つ。新秩序期インドネシアのポピュラー・カルチャーは、そのような変動的状況を生み出したひとつの重要なフィールドだったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、インドネシアの新秩序期（1966年-1998年）の文化史を若者雑誌の登場・変遷・交代といった現象から描きつつ、そこにおける政治体制の変化と若者の意識の変化の相互作用を論じた、意欲的でオリジナリティに富む力作である。主たる分析の対象は、1967年に創刊され1978年に一般総合誌への衣替えというかたちで実質的に廃刊となった『アクトゥイル』という若者向け娯楽雑誌で、本論文はこの雑誌が作り出した若者たちの世界を1980年代以降の若者向け雑誌のそれと対比するかたちで詳細に描き出している。論文審査においては以下の点が評価された。

第一点は、本論文執筆のために著者が行った資料収集の努力である。もともと出版物の保存がよくないインドネシアにあって娯楽雑誌である『アクトゥイル』はほとんど図書館になく、著者は当時の編集者、購読者たちを訪ね歩いてバックナンバーを集めた他、新聞2紙に数回に渡って広告を出すなどし、最終的に全260号の8割を入手した。さらに同誌の編集者、読者など50余名にインタビューを行った。これら並々ならぬ資料・材料収集によって詳細な分析がはじめて可能になっている。

第二点は、本論文が初めて提示した初期新秩序の若者雑誌の意義である。本論文はカルチュラル・スタディーズの概念やアプローチを用いて娯楽雑誌を分析し、「地図にはないコミュニティ」の形成、意識の脱領域化、流動化、離脱などを描き出している。また、若者たちのそうした一見非政治的な娯楽への没入が、体制転換をもたらした暴力的事件（9・30事件後の状況）のトラウマからの逃避という「政治的」意識の反転であったという指摘も興味深い。さらに、80年代以降経済発展とともに若者文化が産業化され、『アクトゥイル』も実質廃刊し、新たな若者雑誌が広まる中で意識の再領域化というかたちで体制による取り込みが進行したことまで論じ、これによって新秩序期の若者文化のひとつのサイクルを記述したことになる。この一連の分析は著者独自のものであり、この点、インドネ

シア文化史研究にとって貴重な貢献をなしたと評価できる。

第三点は、新秩序期の若者文化に対して、収集した資料に基づき、体制側・権力側の絶えざる介入があったことを具体的に述べていることである。そもそも欧米ポピュラー・カルチャーの解禁は誕生したばかりのスハルト政権（新秩序）が「新しさ」をアピールするために意図的に行ったものであり、体制転換を主導した国軍がコンサートを開催したりする等、プロパガンダに利用されたという側面があった。しかし、若者たちは、必ずしも体制の意図にからみとられていたわけではなく、アマチュア・ラジオの普及によって欧米ポピュラー音楽のオーディエンスを作り出し、雑誌を通じて欧米のカウンター・カルチャーをインドネシアという国の日常へと文脈化していった。こうしたグローバル化した意識が1998年の改革（スハルト政権崩壊と民主化）に参じた若者たちを支えていた。こうした分析は、本論文が文化を権力をもつもの・もたざる者の不断の闘争の場とみなす理論を基礎としている点と軌を一にするものであり、文化と政治の関係をダイナミックにとらえた議論となっている。

一方、本論文には課題もある。まず、文章がかなり読みづらいものである上に、概念の定義がはっきりしない、用語選択が適切でない箇所がいくつかある。また、本論文が対象とした若者の階層（主として都市中間層）、宗教的傾向（比較的世俗的）等を考慮すると、インドネシア社会全体に対する議論の妥当性も限定的なものとならざるをえない。さらに、若者文化と意識について、新秩序期全体の流れを包括的に論じようとするならば、1980年代以降の若者雑誌・若者文化の動向をもっと詳細に跡づける必要があるだろう。こうした問題については今後の課題となるが、著者はこれらの問題を探索する十分な力量をもっていると言える。

以上から、審査委員一同は、本論文をすぐれた博士論文と認め、合格と判断するに至った。